



SMFは2008年からの活動を通じて、県内5つのミュージアムにおける芸術・文化の拠点づくりにとれない、さまざまなかたちでアートに関わる人びとの交流の場を数多く立ち上げてきました。そうした交流や活動のいくつかはすでに県内に定着し、あるいは、そこから生まれた交流が新たな流れを作り出す動きがみられるようになってきています。そうしたなか、SMFは「SMFアート長屋」の立ち上げに向けて準備を開始しました。この「長屋」は、私たちが考えている「アートプラットフォーム」をウェブ上に作るという構想です（「SMFアート長屋」についての詳細は次ページにあります）。

この〈SMFアート寺子屋2014〉は2012年に引きつづき、2回目の実施となりました。今年度の第一回目の寺子屋は「あなたも今日からアーティスト」というタイトルで実施し、上記の「SMFアート長屋」の立ち上げにむけて「アートとは誰のものなのか?」、「アーティストックであるということはどういうことなのか?」、「アートのプロやアマチュアとは誰のことを指すのか?」といったテーマから、私たちがめざす「長屋」をどうしたら明確にイ



左より竹本清香さん、三ツ木紀英さん、毛利嘉孝さん

メージしていけるかを考える場としました。

パネラーとして**三ツ木紀英さん**、**竹本清香さん**、**毛利嘉孝さん**をお招きしました。三ツ木さんはアートプランナーで、認定NPO法人芸術資源開発機構副理事長をつとめられています。美術館という場にどのように一般の方がたをひきこんでいくのかという近年の活動や、ケアハウスでのアートワークショップなどでの活動の報告とともに、ワークショップに参加した人びとの創意や潜在的な表現欲をひきだす実践を示していただきました。竹本さんは合同会社芸力代表として、数多くのアーティストのウェブ上のデータベース構築を手がけておられます。100年後にもデータベースによってアートを残していくためのアーカイブ化についてお話いただきました。社会学が専門の毛利さんはとくに音楽と社会についての活動も活発にされ、東京芸術大学准教授をつとめられています。鑑賞するアートではなく、人びとが自分で作品を作って見ることを楽しむというアプローチのほうが本来のアートのかたちなのではないかという、アートにおける「DIY(Do It Yourself)の文化」についてお話していただきました。

パネラーの皆さんのお話や、その後のパネルディスカッションでは、美術教育の授業時間数減少や景気低迷による美術系大学の教育費の増加などが話題になりました。その反動で美術館でのワークショップが盛り上がっている可能性がある、また確立したアーティストの作品を鑑賞するだけではなく、だれもが自分で作ってみたり参加してみたりすることが本来のアートの姿ではないかということも大きな話題となりました。こうした活発な議論からSMFが立ち上げていく「アート長屋」の方向性についての力強いヒントが得られました。（参加：48人）

柴山拓郎(SMF運営委員)

SMFアート長屋 www.artnagaya.jpの立ち上げ

あなたと
どこでも
アート
小さな家
プロジェクト

SMFでは、これまでに埼玉県内のアートに関わるいくつかの拠点と、さまざまなかたちでアートにかかわる人びととを結びつける活動をしてきました。その活動ととして、「アーティストックであること」について、よりひろがりのある視点でとらえる必要性が明確になってきました。その視点とは、アートをつくりだす側だけが「アーティストック」ではなく、アートの鑑賞が好きな人、アートワークショップに参加して楽しいと感じた人、日常的になにか工夫をこらして生活している人など、アートに関わるすべての人びとが「アーティストック」なのではないだろうか、というものです。

そうした視点をどうしたら具現化できるのかという着想から、「SMFアート長屋」を立ち上げることになりました。参照したのは、日本建築家協会ウェブサイトの「10000人の建築家展」というウェブサイトです。そのウェブサイトは、世界中の建築家が自身の作品を提示しながらも検索機能やデータベース的な側面をもたない、一風変わった情報空間をつくりだしています。それを参照しつつ、当初は「700万人の芸術家展」という名称をイメージしていました。700万人とは埼玉県の人口であり、つまりすべての人びとが芸術家たりえるという構想をあらわした名称のイメージから、この長屋は出発しました。

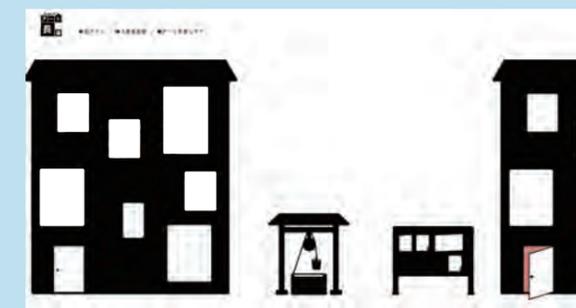
どのようなウェブ空間を作っていく必要があるのかについて、「あなたも今日からアーティスト」と題したシンポジウムの成果をふまえて開催し、その方向性がしだいに明確になってきました。そこから見えてきたアイデアをもとに、プロやアマチュアという概念を再考しながら、アートに関心を持つ人びとがさまざまなかたちでアートに関わる「共同住宅」をイメージしたウェブサイトという構想がまとまりました。その「共同住宅」は、アートをつくる側の単なる情報発信やアーティストのデータベースではなく、そ

こにつどう、アートに何らかの関わりのある多くの人びとの交流をととして、新しい創造のアイデアや場を形成していくことができるような交流空間として発展していくことを理想としています。

制作にあたり、「10000人の建築家展」のウェブサイトの構築を手がけた**(株)キャベッジネットさん**に制作を依頼しました。アート長屋をどういう場にすべきなのかという概念はまとまりつつあっても、実際にどのようにデザインしていくことでそれが実現できるのかということについては、お互いに未知な取り組みでした。したがって、より多くの方がたに長屋に入居してもらえるようなしかけや、今後の発展の方向性について、キャベッジネットさんと制作業務の委託をこえたアイデア交換も活発におこなわれました。たとえば、過去に実施した「SMF三茄子展」では、多くの方がたに提案していただいたアート計画をもとに、実際にアーティストどうしの協働が生まれました。また、SMF開始当初から実践している北浦和西口銀座商店街の方がたとの協働のありかたについての模索は「きたうらワン」というキャラクターを生みだし、また今年(2015年)1月に実施した〈SMFアートのまつり〉では埼玉県宮代町のみなさんのご協力を得て、さまざまなアーティストの活動発表や作品発表をととした交流会を実施しました。そうした場合は、アートを生産する側だけの視点で形成されたのではない、あらたなビオトープ(biotope 生息空間)となるはず

です。だれにでも参加でき、さまざまなかたちでアートと関わる人びとが気軽にアイデアを出し合うことができ、プロやアマチュアという枠をこえて、たがいに触発されながら成長していくのが「SMFアート長屋」です。それは公開した瞬間ではなく、公開後の成長過程にこそ、その大きな意味がたちあらわれてくると考えています。

柴山拓郎(SMF運営委員)



パイロット版ウェブサイトトップ



入居者募集チラシ